

## パイナップル缶の思い出

豊見城市立伊良波中学校二年 城間 一華

「ただいま」

私は、焦る気持ちを抑え、ラケットとカバンを床に置き手洗いうがいを済ませた。熱のこもった身体を開放したい一心で急いで冷蔵庫を開けた。パイナップル缶を掴み取る。

柑橘系の爽やかな酸味が体中に広がり染み込んでいく。エネルギーチャージ完了。パイナップル缶は時空を超えて私を元気にしてくれるかけがえのないものだ。そしてパイナップルを食べる度に、オバーから何度も聞いたおじいの話の思い出出す。

「オバーが初めて、子供を身ごもった時につわりが酷くて寝込んでいたら周りの人達は病気でもないのにと文句を言った。何も食べられなくて苦しい思いをしている時におじいとはとても優しくしてくれた。当時、とっても高価でめったに食べられなかったパイナップルの缶詰をオバーのために買ってくれた。そして誰にも見つからないように内緒で食べさせてくれたのよ。その時のパイナップルの味は今でも忘れられない。本当に美味しかった。オバーの旦那さんはね、とても優しくハンサムだったんだよ。」

私はその話を聞く度に心が暖かくなった。顔も知らないオジいに優しく抱っこされて守られてるような感覚になるのだ。

去年の暮、オバーが百歳の天寿を全うして亡くなった。沖縄の南部で生まれ育ち結婚をしたオバーは、史上最悪と言われる多くの住民が犠牲になった南部戦線で命からがら生きのびたオバーは二十四歳の若さで戦争未亡人になった。それから再婚もせず女一人で幼子を抱えて懸命に生きてきた。親戚の人達が口々に、

「戦死したオジいと天国でデートしているだろうね。」

と笑って言う。私は笑わなかった。笑えなかった。私はオバーが元気だった頃を思い出した。親戚の人が

「オジいは二十四歳で戦死したから、こんなお婆ちゃんに天国で会っても気づいてくれるかな。」

と笑った。日頃から、オバーの戦争体験やオジいのお話を聞いていたし戦争を体験した者同士の話と分かっていたても、なんだか戦争のことを忘れてしまっているような気がして、私は悲しくなった。人は戦争で受けた痛み、苦しみ、悲しさを忘れてしまうのだろうか。七十六年前、沖縄戦でたくさんの罪の無い人々の尊い命が奪われたこと。この美しい島で起きた悲劇は風化してしまうのだろうか。

梅雨の晴れ間、青空がひとときわ鮮やかな今日、私は平和の礎(いしじ)に向かう。さざなみの池の中央で燃える平和の火に向かって真っ直ぐに伸びる白い通路を幼い弟たちと手を繋ぎ、ゆっくりと歩いている。見慣れた地名、見慣れた苗字が並んでいる。黒く光る慰霊碑からオジいの名前が白く浮かび上がる。

「オジい、今年も会いに来たよ」

オバーの真似をして、刻まれた名前を指で確かめるように、ゆっくりとたどる。献花とさんびん茶とパイナップルの缶詰をお供えして目を閉じ祈りを捧げた。

「オジい、私の大好きなオバーに優しくしてくれてありがとう。人のことを思いやれる優しい心、肝心(ちむぐる)の大切さ、それは何年経っても色あせることがないことを知りました。心配しないでもいいからね。オジいの無念さ、戦争で大切な人を失ってしまったオバーの悲しみ。私達は、いつまでも忘れない。風化させないように幼い弟達や友達、次世代の平和の担い手になる若い人達に、しっかりと語り継いでいくからね。」

私は幼いころから一度でもいいから、オジいに会いたいと願っていた。戦争さえなければ、戦争さえ起こらなければ会えたのかもしれない。オジいの優しさを直に感じたかった。この悔しい気持ちは一生消えないだろう。戦争は私の優しいオジいを奪ったのだ。憤りは、大きな怒りの火玉となり沸々と私の中で燃え続けている。

悲惨な戦争を体験して生きのびたオバーは亡くなる寸前まで、戦争で受けた心のトラウマに苦しめられた。真っ暗な壕にいる夢を見て夜中に大声をあげ、飛び起きる。沖縄戦は私の大切な人を奪い何十年もオバーを苦しめ傷つけた。二度と戦争なんかしてはいけない。二度と同じ過ちを繰り返してはいけない。オバーのように苦しむ人をつくり出してはならない。私は、オジいが教えてくれたパイナップル缶の優しさを抱きしめながら大切な命を精一杯生きよう。肝心(ちむぐる)の精神がある限り永久に平和は続く。それはどんな苦境にいても命を繋ぎ、平和を守る力になると私は信じている。